住井すゑとその文学の里（二十七）

ー牛久沼のほとりー

牛久市文化財保護審議委員
栗原（くりはら） 功（いさお）

毎日新聞記者【増田れい子】ー大手紙初の女性論説委員にー（前編）

今回と次回は犬田卯・住井すゑ夫妻の二女増田れい子（毎日新聞記者増田滋と結婚）を紹介する。

増田の自著『一本のペン（大月書店刊）』の第一章（1）沼のほとりに、「私は牛久沼の上の家で少女期を過ごさなかったら別の道を歩いていたかも知れないと思う」というくだりがある。

その増田れい子は、昭和4年（1929年）1月5日に、東京杉並で生まれ、父卯の故郷牛久村（現在の牛久市）の尋常（じんじょう）小学校から、県立土浦高等女学校（現在の土浦第二高等学校）へ進み、昭和20年3月に卒業。引き続いて同年8月15日の敗戦の日まで、前年からの学徒動員（労働力不足を補うため学生・生徒に対して強制された勤労動員）先、阿見町（旧阿見町）の第一海軍航空廠（しょう）で働く。

終戦の混乱の中で、翌年、東京目白の日本女子大学校（後の日本女子大学）国文学科に入り、卒業と同時に東京大学国語国文学科（旧制・3年制）に進む。

在学中、増田は、同人誌『現代文学』に集った。同じクラスの大岡信氏（後に詩人）、日野啓三氏（後に作家）、佐野洋氏（後に推理作家）、そして中江利忠氏（後に朝日新聞社長になる）、稲葉三千男氏（後に東久留米市長になる）らがメンバーであった。

昭和28年（1953年）3月、同大卒業と同時に毎日新聞東京本社に女性記者として採用された。この年から同社は従来女性記者を別枠で採用していたのを廃止し、初めて男女同等の資格条件で二人を採用した。当時の毎日新聞東京本社は有楽町に社屋があり、社員6500人、発行部数461万部、第二位に60万部の差をつけていた。

新人記者は見習生と呼ばれた。昭和28年当時、同じ記者とは呼ばれてはいても、何段階にも格差があって、〝見習生〟出身のエリート記者のほかに〝野武士（のぶし）〟出身がおり、その下に準社員記者としての〝雇員〟、さらにその下に〝赤伝（あかでん）〟と呼ばれる記者がいた。〝赤伝〟というのは正式に会社から給料が支払われない。社会部なら社会部の経費予算の中から物品伝票である赤色伝票に事務係が金額を書いて金を引き出し、給料に換えるというシステムであった。

赤伝を最底辺に、雇員、野武士、見習生と4段階もある記者層のほかに女性コースがあった。女性の場合、赤伝かよくて雇員扱いだったようだ。そういうところへ女性の見習生が入ったというのだから増田の入社はやはり波紋の一つのようでもあった。

入社試験の面接の席上、居並ぶ編集局をはじめ全部局幹部と増田との間で、

「新聞社に入ったら何をやりたいか」

「小説を書きたい」

「新聞記者は小説書きではない！」

という問答があり、

「それのどこが悪い！」

と増田が言いそうになったとき、

「新聞記者の仕事の余暇に小説を書きたいんでしょう」

と編集局長が助け舟を出してくれたという。

その当時毎日新聞記者出身の井上靖が、昭和24年（1949年）下期の芥川賞を『闘牛』で受賞して本格的作家活動に入っていた。

⬆母住井すゑと増田れい子（写真右）
平成4年（1992年）秋　　—大倉舜二氏撮影—